

## 本物の感動

「貴方が信じるものを、誰かに決めさせてはいけないわ。」このセリフまで読んで、私は自分の目が熱くなるのを感じた。切なさに号泣したのでも、感情を大きく揺さぶられたのでもなく、ただ静かに、涙が流れていた。何故なのかは、今でも分かっていない。だからこそ、この物語は私の人生において大きな意味を持つ宝物となるだろう。西加奈子さんの作品、『サラバ!』は主人公歩の半生を記した小説だ。歩は生まれた時から寡黙な父、誰よりも幸せになりたい母、変わり者の度が過ぎる姉に囲まれて育ったため、なんでも容量よくこなし、うまく溶け込んで過ごせるかわりに 自分に芯がなく、周りに振り回されていた。

私は小学三年生の時に、初めてこの本を読んだ。当時はあまり意味が理解できず、分厚い「大人の本」を読みきったことに満足し、それ以降『サラバ!』を開くことはなかった。しかし、中学三年生になった今、六年ぶりに読み返してみると、一つ一つの文が全く違う意味で、私に迫ってきた。

特に、下巻の歩と姉の貴子が横に並んで散歩をするシーンが深く胸に突き刺さった。それは物語のクライマックスでもなければ、大きな事件が起きるわけでもない。静かなシーンだ。でも、私はあの何気ない会話と、少しぎこちないけれど確かな「つながり」の感触「貴方が信じるものを、誰かに決めさせてはいけないわ。」という貴子のセリフに胸がじんと熱くなった。そして、いつの間にか涙を流していた。

歩はずっと、自分を「傍観者」だと思っていた。個性的で自己中心的な家族に囲まれたが為に、人と深く関わらず、傷つかず、波風立てずに生きることが正しいと信じていた。しかし、様々な出会いと別れを通して、彼の中の何か少しずつ変わっていく。そして、最終的には、「自分もこの世界に触れて、傷ついていて、生きていくしかない」と気づいていく。それは、私自身が今感じていることにも重なる。

私にとって、「貴方が信じるものを、誰かに決めさせてはいけないわ。」という貴子のセリフは他人事ではない。私は、自分の意見が弱く、周りの人の意見に同調し、その場を取り繕うことが多かった。自分の意見はあるのに、それを否定されるのが怖かったり、理解してもらうために相手と対話をするのが面倒に感じてしまったりして、ずっと他人ときちんと自分の意見で対話することを避けてきた。否定されて傷ついても、伝わらなくても、理解してもらえなくても、そういうこともひっくるめて全て「生きること」ではないか。『サラバ!』を読んで、そう思えた。私は自分の意見を、自分を信じる。

それだけでなく、『サラバ!』は自分が傷ついても信じるものを自分で決めて信じ抜き、そのうえで誰かと一緒に生きていくことの美しさも教えてくれた。きっと歩にとって貴子は、昔から「変わった姉」だった。何かを強く信じて、突き進んで、家族の枠からも社会の枠からも逸脱していったような人だった。歩はずっと、そんな姉に戸惑い、距離を置いてきたが、時が経って再開したとき、姉は穏やかになっていて、歩の隣を歩いていた。過去のわだかまりも、理解できなかった思いも、完全に解決されたわけではなくても、ただ隣にいる。それだけで救われることがある。許されたわけでも、分かり合えたわけでもない。でも、同じ時間を共有するだけで、何か回復していく。それは言葉以上のものだったのではないかと思う。『サラバ!』という物語全体がそういった“希望”の連なりのように感じた。歩は物語の中で、宗教、国籍、家族、自己の在り方、あらゆる他者との出会い、翻弄されながらも、自分を見つけようとし続ける。彼の旅路は、一つの答えにたどり着けるとは限らないけど、それでも生きて、進んで、誰かと並んで歩いていく。そのことが何よりも尊いと、この本は教えてくれたように感じる。

きっとこの本は、私がこれから大人になって、また何度も読み返すことになるのだと思う。そして、そのたびに響くシーンも変わるのだろう。もしかしたら、今は涙した姉との散歩の場面が、将来の私にはまた違った意味に見えるのかもしれない。『サラバ!』は、ただ面白かったとか、心に残ったというレベルではなく、私の人生と一緒に呼吸してくれるような物語だ。何故私はあのシーンで泣いたのか。その理由を、私はまだうまく言葉にできない。しかし、その「わからないまま涙が出る感覚」が、まさに本物の感動だったのだと思う。これからも何度でもページをめくりながら、私はその意味を探していくだろう。